

# AI収穫ロボに注目

## 直売所向け需要予測も

九州農業 Week

熊本県で5月22日から3日間、開かれた「九州農業Week」では、九州をはじめ全国の農家や農業団体が活用できる農機具やサービス、普及に力を入れる生産資材などが提

案された。人工知能（AI）が搭載された収穫ロボットや農産物直売所の課題解決に向けたネットサービスなどが、来場した農家らの関心を引いた。施設の機械制御を専

門とするアイナックスシステム（福岡県久留米市）は、高設栽培イチゴの自動収穫ロボット「ロボつみ」を披露した。ロボットは、地面に張ったロープの上を移動し、施設内に張ら

れた移動用マークとQRコードを読んで進路を決定。AIが収穫適期のイチゴを選び、ロボットアームで果実のへたの真上で切断してトレーに置く仕組みだ。

1時間当たり180個のイチゴを摘め、収穫した果実の品質の安定化や収穫労力の軽減が期待できるとした。本体価格は200万

円。対応する品種を「あまおう」以外にも増やしていく。キュウリやトマトなど他の作物への展開も目指す。NTTデータ関西（大阪市）は、4月に提供を始めた農産物直売所向けの需要予測サービス「アグリアスエー」を紹介した。販売時点情報管理（POS）データと気象情報から、2週間分の日々

の予想販売数を可視化。直売所の運営者が導入し、売り損じがな

いよう役立ててもら

う。出荷者もスマートフォンなどで販売予測を確認し、出荷数量や価格設定の参考にでき

る。「実証試験では実際の販売状況と予測の誤差は1割以内に収まった。売り損じが減り、導入費を上回る利益が出る」としている。既に試験導入しているJAもあるという。



適期選別イチゴ摘み

▶アイナックスシステムが開発したイチゴ収穫ロボット「ロボつみ」  
▼オーレックが販売する種ごと食べられるスイカを作る花粉「タネフリー」（いずれも熊本県益城町で）



スイカ種ごとパクリ

スイカが種ごとオーレック